



**香野** まずは自己紹介から始めていいでしょうか。

**シオリヌ** はい、お願いします。

**香野** 私は静岡大学というところで教員養成の仕事をしていて、専門は特別支援教育、いわゆる障害児教育ですね。そこで障害のある人たちに性教育をやるうという流れがずっと前からあって、いろいろ調べていくと当然シオリヌさんに出会うことになるわけです(笑)。

**シオリヌ** ありがとうございます(笑)。

**香野** 私がシオリヌさんのYouTube動画を見始めたのはけっこう前で、2019年頃からなんですよ。

**シオリヌ** すごいですね。最古参じゃないですか。動画の投稿を始めたばかりの頃ですね。

**香野** これはもう何度もお話しになっていると思うのですが、そもそも

YouTubeで性教育をやるうと思われたのはどんな動機だったんですか？

**シオリヌ** もともと産婦人科の病棟で助産師として新卒で働き始めて最初の1、2年は、その病棟の業務に慣れるので精一杯だったので、3年目ぐらいから自分の専門性というか、どういうことに興味があるのかいろいろ考えるようになったんです。そこで性教育に自分はずごく関心があることに気づいて、そこから民間の資格を取ってみたい、少しづつ情報発信の活動みたいなものをするようになりました。それが2017年ぐらいの話です。

最初は、例えば看護学校時代の同級生が働いている学校から声をかけてもらって性教育の授業に出かけてみたりとか、そういうことを始めたんです。けれども、リアル場で会えるお子さんの数ってやっぱり少ないですし、性教育といっても本当に

巻頭対談

Shiorinu

シオリヌ×

Takeshi Kouno

香野毅



幅広いトピックを話す必要がある中で、限られた時間で伝えたいことをすべて伝えるのは難しく、「せめてこれだけは知っておいてください」というふうに情報を絞り込んでお話ししているような状況でした。そこで、もっといろんな方に広く届けられる場所で伝えることを考え始めて、2019年からYouTubeという媒体を使うようになりました。

**香野** シオリーヌさんは当時、20代でしたよね？

**シオリーヌ** 今から5年前だから27歳とかだったと思います。

**香野** 20代の女性の方がそういう話をするにすごく価値があったというか、インパクトがありますよね。  
**シオリーヌ** 最初は中高生くらいの

年代に向けて、自分の体に第二次性徴が起きる話とか、大人になる前に知っておいてほしいことを伝えたいという思いでYouTubeを始めたいのですが、いざ始めてみるとすごく幅広い年代の方が観てくれていたんですね。70代の人から「自分はこんな話をどこでも習わなかったけれども、とても大事なことだ」みたいなコメントが来たりして。こうした上の世代の方もそうだし、それこそ性教育について習わないまま20代、30代になって、いざ自分が妊娠や出産を考えたときに必要な情報ってあるし、対象は中高生だけではいけないという動画を配信を続けていく中でどんどん実感してきて、そこから広がっていった感じはありますね。

**香野** 私も勉強のために教科書や書籍を読みますが、そこで初めてと言っていいぐらい生理の仕組みをしっかり学びます。むしろ「伸びしろ」は私たちの年代の方こそ大きいと思いますね。

**シオリーヌ** いや、本当にそう思います。最近も50代以上の方をターゲットにした性教育の本が出て話題になっていましたよね。大人の学び直してみたいなことは、性教育を届けている中ですごく必要性を感じている部分でもありますし、一方で、中高生向けの性教育、例えば学校の中で行われている性教育についてはやっぱり制度から変えないといけないという課題がまだまだ残っているんですね。じゃあ、そこを変えたいと思ったときに、誰にわかってもらわなければいけないかというと権限を持つているのは50代から70代くらいの男性の方が多かったりするので、そうした人たちにわかってもらわないと、子どもたちにも届けられないという大きな問題意識はありますね。

### オンライン活動への反応

**香野** YouTubeのようなオープンな形で性について話すことでいろんな

反響があったと思うんですが、ポジティブなものがある一方でネガティブな反応にはどんなものがありましたか？

**シオリーヌ** 私の活動に対しては、いわゆる「寝た子を起すな」みたいな反応はそんなになかったんですが、一番多くて嫌だったのはオンラインセクハラですね。やっぱり若い女性が顔を出して、あっけらかんと性の話をしていると、話している内容は性教育の話をしているだけなんですけど、この人は性の話をこんなにオープンにしゃべっている人から性的な欲求をぶつけてもいいんだと捉える人がすごく多くて。

例えば、生配信をしていると、マスターベーションを見せろとかセックスの実技指導をしろとか、もっと服を脱げというコメントが来たり、ダイレクトメッセージで性器の写真が送られてきたり、そういうことは教え切れないほどありました。

**香野** すごくショックを受けています。想像した答えはアンチ性教育だったので、予想とまったくちがいました。

**シオリーヌ** 性教育の話とアダルトコンテンツの区別をしてもらえないことに驚きましたね。もちろん心が

元気なときは、こういう人にこそ性教育は必要なんだろうなと思って終わりなんですけど、でもやっぱりそういうことがどんどん重なってくるとすごく気持ちも落ち込みます。あと、私の容姿へのバッシングもとても多かったですね。デブとかブスとか、「相手してくれる人がいないだろう」「みたいな、性教育とは全然関係のないバッシングがすごく来るんです。

やっぱりオンライン上で活動する人にとっては、自分の心の健康を保つのもすごく課題だと思っています。私もいろんな対策をして、自分がコメント欄を見る前に一回スタッフに見てもらって、明らかにただの嫌がらせは消してもらったり、写真が送れるようなダイレクトメッセージは閉じるとか。なぜこちらが自衛をしなければならぬんだということは感じるけど、でも嫌な思いをするよりは元気に活動を続けられる方がいいなと思っていろいろ対策した結果、今ではそういう経験は減ってきています。

### 性別や環境による意識の差

香野 昨年、大学の学生と一緒に実

施した調査があるんですけど、例えば、性的同意のことや避妊のこと、性感染症のことなどさまざまな項目を挙げて、「これって学校で教えるべきだと思いますか？ それとも世間の中で知るべきだと思いますか？」と尋ねてみたことがあるんです。対象は大学生の男性と女性、教員の男性と女性に分けてやりました。結果は思った以上に「学校でもっと取り扱ってほしい」ということがよくわかりました。そして、細かく見ていくと女子大学生と男子教員の回答の傾向がずれていたんですね。一番印象に残ったのは、性的同意や性に関するコミュニケーションの取

り方を男性の年配者ほど扱いたくないということなんです。ほかの項目でも若干差は出るんですが、若い女性との差が一番出たのはそこでした。**シオリ** ああ、やっぱりそうだろうなと思います。主語を大きくして「男性は」「女性は」と言うのはあんまり良くないなと思いつつ、性教育の関心度に関しては圧倒的に女性の方が高いというのはいろんなところで感じています。一般の大人向け講演会でも参加者がほぼ女性なんです。保護者向けでもやっぱりほとんどがお母さんです。そこで出る質問も「夫が理解してくれない」というのが本当に多くて。

やっぱり妊娠や生理というものを経験するのが女性であったり、性被害を受けるのもほとんどが女性だったりするので、性に関して自分が脅かされる、リスクを感じる、怖い思いをする機会が、この社会で女性として生きていくとどうしても多くなることがあると思います。同時に、例えば自分の子どもを被害者にも加害者にもしたくないという思いも、女性の方が切実に抱きやすいという印象はありますね。

だからこそ、もっと学校で性に関することを教えてほしいかつたし、それこそ母親になってから子どもに教えたいたいと思うけれども、自分が十分に習ってきていないから教え方がよくわからないという問題はあると思います。

**香野** 性被害や性暴力といった項目も、やはり女子大学生が学んでほしいと上位に挙げたものでしたね。この調査ではいわゆる「学校知」と「世間知」のことを問うたんですが、あとからもう一つ加えればよかったと思ったのが「家庭知」です。特に性教育については、それぞれの家庭の中での取り組みが重要だったりしますよね。

**シオリ** それはありますね。そ





れこそ「お家性教育」という言葉が  
すごくメジャーになったり、そうい  
う特集がテレビや雑誌で組まれてい  
るので、「お家で性教育は大事だよ  
ね」という意識はすごく広がってい  
るけれども、でもやっぱり親御さん  
たちは、やらなきゃいけないのはわ  
かっているけどどうやったらいいの  
かわからない、誰か助けてほしい、と  
いうそういう声が挙がっている状況  
がまさに今っていう感じがします。

**香野** そうした人たちの期待が、学  
校で教えてほしいという「学校知」  
の方に来ているかもしれないですね。

私たちは心理臨床の仕事をしていて、  
「個人差」とはよく言うけれども、  
同じかそれ以上に大きいのは「家庭  
差」なんです。性教育はお家で  
やってね」となったらものすごい差  
が出るだろうと思います。

**シオリヌ** 確かに現状は親御さん  
がどこまでアンテナを張っているか、  
自分の中にあるハードルや抵抗感を  
どれだけ乗り越えてチャレンジする  
か、みたいなどころにかかっています  
ね。それは学校も同じで、やっぱり  
その学校の中に性教育に関心のある  
先生がいるかどうかで生徒が受ける

教育はまったく違ってくると思いま  
す。本当は制度のところから変わっ  
てほしいと思うんですけど。

一方で、民間から提供される性教  
育コンテンツはすごく増えたと思う  
んですね。YouTubeのチャンネルも  
たくさんの方がやられていますし、  
いろんなウェブサイトや本やアニメ  
もあるし、今は性教育に取り組もう  
と思ったら、できることも使えるも  
のいっぱいあると思うんです。あ  
とは性教育に関心を持っていない多  
くの方々に、いかに関心に向けても  
らうかみたいなところが、今はすご  
く大きな課題だろうなというふう  
に思います。

**香野** 実は「今日、シオリヌさん  
に会うんだよ」と周りの何人かに言  
ってみたんですが、「へえー（どな  
た?）」という反応の人と「ああ、  
いいですね!」と言う人がいて、関  
心のある人となない人がきれいに分  
れているんですね。

**シオリヌ** わかります。すごくギ  
ャップが大きいですよ。だからこ  
そ、今まで関心がなかった人にか  
ら興味を持ってもらうかが大事だと  
思っています。

## ケアの仕組みづくり

**香野** ちょっと話が飛んですみませ  
んが、今、新しいお仕事として「産  
後ケア銭湯」の取り組みを始められ  
ていますよね。ご自身の出産・育児  
の体験もあると思うんですけども、  
始められたきっかけはなんですか?

**シオリヌ** あれはもう必要に駆ら  
れてというか、やっぱり自分も助産  
師なので産後の生活がすごく大変と  
いうのはもちろん知識としてありま  
したが、いざ自分が子どもを出産し  
て、初めて自分が産後というのを体  
験したときに、しんどさが想像以上  
だったんですね。30歳を過ぎて、ま  
さか自分が眠くて泣くとは思わな  
く(笑)。

このままでは産後うつになってし  
まうと思うてたんですが、ちょうど  
そのタイミングで民間の産後ケアホ  
テルみたいなものを体験する仕事があ  
って、一人でゆつくり休んで、ぐ  
っすり寝たあとに会う我が子がもう  
可愛い過ぎました。どんなに泣いて  
いても、「やだ、可愛い」みたいな  
(笑)。

**香野** 見え方が変わったんですね。  
**シオリヌ** 親のゆとりってこんな

に大事なんだと実感したんですね。でも今、自治体で行われている産後ケアにはすごく課題が多くて、自己負担額は少ないけど使える人が限られていたりとか、申し込みの手順がすごく複雑だったり。一方で民間の産後ケアホテルみたいな施設もすごく増えてきていますが、1泊するのに6万円や7万円というのが相場なんですよ。

自分が寝たいというただけに、一晩に7万円を払えるお母さんはどれだけいるのかと思ったら、やっぱり簡単に選べるものではなくて…。だから普通のお母さんが、「ああ、もう限界」というときに、ぱっと休めるものって世の中にないと思っただけに、一人で休める時間をお母さんたちに渡せる選択肢を、この社会の中で用意しておかないといけないんじゃないかと。そういう意識みたいなものがすごく芽生えて、やらずにいられなくて始めたという感じです。

**香野** その取り組みは株式会社Rineとしてやっているんですか？  
**シオリーヌ** もともと講演活動やYouTubeの発信は個人事業主でずっとやっていたんですけれど、やっぱり施設さんの協力などを得ながら事業



をおこなっていくには信用も大切だろうと思っただけで、まず会社を作ったんですね。その中の事業の一つとして「産後ケア銭湯」をやっていたんですが、一年ぐらい仲間を増やしたりしながら実施していく中で、これは「営利目的の事業ではないな」と気づきました。

ちゃんと関わってくれる人にお給

料を払いながら、会社にも多少の利益を出しながらやろうと思っただけで、結局、お母さんたちから2万円や3万円といった利用料をもらわないとできないとなってしまっただけで、やっぱりお母さんたちからそんなお金は取りたくないよねという気持ちで拭えなくて。経営者としてはすぐダメなんですけどそう思ってしまったので、じゃあ、これはもう株式会社としてではなくて非営利団体であるNPOにして、いろんな方からの寄付とか助成金とか、そういうものを活用させていただきながらお母さんたちの負担を下げて、でも関わってくださる人にはちゃんとお礼を支払えるみたいな形を作る方向を目指した方がいいと思って、今年になってNPOコハグを作ったという感じなんです。

**香野** なるほど、そういう流れや理由があったんですね。私は障害関係や福祉関係の人たちと一緒に仕事をやる機会が多いんですが、「思いはあるけどお金がない」ということが多くて。単発でやって成功する人はいるんだけど、それをちゃんと仕組みとして回るようにしていくところの知恵を出すのが難しいんです。それをシオリーヌさんは形にされた

というか、形にしている最中なんです。ね。

**シオリーヌ** はい、チャレンジ中です。持続可能な形に、やりがいだけで走らないようにするために努力中という感じですよ。

### 性教育という枠を超えて

**香野** 最近の動画では旦那さんが出てきたりお子さんが出てきたりして、そういう家族の生き方というかライフデザインまで取り上げる対象に入ってきている感じですか？



**シオリヌ** 自分がYouTubeを始

めたときって、性教育の発信自体が本当に世の中に少なかったんですよ。そのため、コンドームの付け方とかアフターピルの使い方とか、基本的な授業っぽい内容をたくさん上げていたのですが、今はそういうコンテンツは数多くあるじゃないですか。今はそういうことよりも、性教育にはまだピンと来ていないけれども、何かのきっかけで、「ああ、性教育って大事なんだな」と少しでも知ってくれたらという思いで、家族の動画も上げています。私と夫がジェンダーについてちよつと話したり、同性婚が早く実現できたらいいよねとか、何かそういうところから、「これも性教育の話なんだ」と知ってもらえたらいいなと。もう自分の妊娠とか出産のこととか、全部動画に上げていますね（笑）。

**香野** 全部観ました（笑）。夫のつくしさんとの関係がこれからどうなっていくんだろうとか、ちびりーぬさんはどういうふうに育つんだろうとか。そういうことを発信することで、小さい子どものいる家庭ってこういうふうになっているとか、夫婦ってこんなふうには協力したり、意見が合わなかったりしながら子どもを

育てていくんだなあということ、若い人たちが観られるというのはすごいことです。

**シオリヌ** 今って赤ちゃんが身近にいない人も多いじゃないですか。私が病棟で働いていたときも、我が子が産まれて初めて赤ちゃんを抱っこするという方がすごく多くて。赤



ちゃんがいると自分の生活がどんなふうになるのか、夫が育休中になんかしているのか、どういう役割分担をした方がいいのかとか、そういうモデルケースを身近で見る機会って本当にないと思うんです。そのための疑似体験ではないけれども、夫婦でこういうふうには話し合っ

てやったりするんだとか、そういう例を知っておくだけでもちよつと役立つ気がします。

**香野** 今、お話を伺いながら思い出したのが、ある女子学生が、赤ちゃんがいる生活ってどんな生活なのか調べたいと簡単な調査をしたんですね。大学生と実際に子育てをしているお母さんたちを対象に、子どもがいるとどんなことができたり、どんなことができなかったりしますか、というアンケートをしたんです。すると、学生の方は子どもがいると一緒に公園に遊びに行ったり、ディズニーランドに行ったりできると、何かこう「ゲット思考」なんです。逆に

お母さんたちは、トイレに行く時間がありませんとか、寝る時間がないとか、気づいたら肌が荒れていましたとか、そういう話がいっぱい出てきて、この結果を結婚する前の若い人たちに見せていいんだろうかと思いました（笑）。子どもがいると生活が本当に大きく変わるということを知らないというか、知る機会がないんだと実感しましたね。**シオリヌ** だから子どもを持ちたいかどうかということも、若い人にはそもそも考えづらいですよ。持ったらどうなるのかもわからないし、

自分の生活がどう変わるかを想像するのも難しいと思います。そこで何かロールモデルがあるのはいいなとは思いますが、夫のつくしはそれをプレッシャーだとも言っているんですよ。動画での夫の姿や行動を見て、彼のようになることを目指そうとしてくれる男性が多くて。

**香野** 私もその動画を観ました。つくしさんが「本当の俺は違うんだ！」みたいと言ってる…。

**シオリヌ** 「私も育休を取って、つくしさんみたいに育児します！」みたいなコメントをしてくれる方もいて、夫はそれをとて嬉しく思いつつ同時にプレッシャーにも感じるみたいですね。そんな完璧なパパじゃないのに、と。でもやっぱり今は、子育てに主体的な男性ってだけで少数派だったりするところがあると思うんです。だからうちのケースだけでなく、いろんなパパがどんなふう

に育児に取り組んでいるのかを知る機会があるいいなと思っています。**香野** やっぱいろいろな人が性教育に関心を持つ入り口を広げていくというのが、今のシオリヌさんの目標ですか？  
**シオリヌ** そうですね。今は講演会に呼んでいただくことがとても多

くて、やっぱり若い年代の方々に必要な情報を届けるだけではなくて、その子どもたちを見守る地域の大人たちが、人権意識や性に関する正しい知識を持っていることが、子どもたちを守るためにすごく重要なことだと思っています。学校の先生方への講演とか、そういうところも頑張りがながら子どもたちを見守る仲間をどんどん増やしていきたいですね。

### 「子どもの人権」を育む

**香野** 私は障害のことをずっと専門に生きて、以前は、障害のある子についていろいろ難しいことがあったり大変なことがあるから、みんな頑張って育てなくちゃと、あれもやろうこれもやろうとなっていたんです。でも最近では、ちょっと全体のムードが変わってきて、今のまま、あるがままを活かしながら、あなたも頑張るけど私も頑張るよ、みたいな形で特別なことをもう少し日常に下ろしていくという流れになっているんですよ。

**シオリヌ** なるほど。「受け入れてあげよう」みたいなムードとは違ってきているわけですね。

**香野** はい。これまでは「上から目

線だった」という反省があるんです。**シオリヌ** 性教育にもそれはありますね。子どもたちに教えてあげよう、何もわからない子どもたちを守ってあげようみたいな。だからこその性の情報を渡さないように困っておくというような、そういう雰囲気があると思います。

**香野** 「渡す」「渡さない」の主導権が大人側にあるということですね。

**シオリヌ** でもそれが、インターネットやSNSが出てきたことで、すべてが制限できるものではないという状況になりましたよね。もう何かを制限しようと思ったって無理なんだということも、大人たちが突きつけられている。隠しているだけじゃダメなんだという空気になってきた感じはありますね。

**香野** 障害の領域では「当事者さん」という言い方をしますが、「当事者」という言い方を好む人もいるし好まない人もいますので慎重に使っていますけれども、その当事者の方たちから、「いや、私たちは確かに障害を持っているけど、だからといって別に何かしてほしいわけではない」「みたいな声が出てきているんですね。ここ数年、そういう動きが大きくて、同じように性のことも、子

どもたち自身が、知るか/知らないか、知りたいか/知りたくないかを決めるんだっていうふうに通いにくいといいなあと思いますね。

**シオリヌ** 今はもう子どもたちの方から「ちゃんと教えてほしい」「大人たちが逃げるな」という声も上がるようになってきていますからね。子どもの声を聴くって本当に大事だと思うんですが、子どもの権利って大人が無視しようと思っただけでもできちゃうじゃないですか。それが怖いなっていつも思っていて大人たちがもつと真剣に、子どもの人権について考えないといけないなと思います。

**香野** 「子どもの権利条約」って改めて読んだらけっこう染みますよね。こんないいことが書いてあったんだって。

**シオリヌ** 染みますね。私もよく読みますが、これは大人として考えなきゃいけないことだと、いつも読むたびに思います。

性教育の話をお聞きする学校の先生としていて、「性行為は何歳から許してもいいと思いますか」と聞かれることがあって、「まず『許す』ものではないと思います」みたいな話をする人が多いんですね。ほかにも「好きな人ができて子どもが告白しようとしているんだけど、止めたほうがいいですか」とか。「止める権利はたぶん親にはないです」と、そういう話になることは多いですね。

**香野** なるほど、親の方に権利があるという感覚なんですね。

話題が変わりますが、性教育を年齢の低い子や発達に遅れのある子たちに届けるために、その根っこはどこにあるんだろうとたどっていくとおしつこやうんちゃごはんの話になるんです。聞いている人からは、「それは性教育と繋がるんですか」と言われるんですが、僕の中ではしつかり繋がっていて、むしろ原点はそこじゃないかと。

**シオリヌ** わかります。それも性教育ですよ。私も「おむつを勝手





に触らない」は性教育だと思っています。

**香野** そうですよ。おしっこは汚くないよ。でもおしっこを触った手で御飯を食べるのは汚いよという微妙さがそこにはあるんです。この二重性こそが性の意識のスタートじゃないのかという思いがあります。

**シオリヌ** 「性教育って何歳から話をすればいいんですか？」ともよく聞かれるんですけど、性教育は日常会話だと私は思っています。いわゆる生理のことを解説しましょうとか、妊娠の仕組みを理解しましょうという話だけではなくて、やっぱりその子の体に触れるときに「抱っこしてもいい？」と聞いたり、おむつを確認するときに「ちよっとおむ

つを見るね」と言ってから見るようにして無言では外さないようにしたり、そういう日常会話の積み重ねが性教育だと思っています。お風呂に入るときも、プライベート・ゾーンを洗うときには毎回声をかけるようにして、「ちよっとお股を触るね」とか。だから性教育はゼロ歳からでもできるというか、相手に伝わるものがあると思っています。

**香野** そういう意味では、すべての子どもが小さい頃から性教育を受けていたはずなんです。でも、その時点ですでに家庭差が生まれるというか、「きたない!」と言われながらおむつを替えられている子どももいるかもしれないし。

**シオリヌ** いや、本当にそうですね。おむつのおしっこがどれだけパンパンなのかを確かめるためにポンポンとお尻を触ったり、親の方がどこまで意識をして、どこで境界線を引いているかによって変わりますよね。こうしたことは「あなたの体はあなたのもの」という感覚や、その子どもの他者との関わり方にすごく

影響するだろうと思います。

**香野** こういった意味でも性教育はコミュニケーションの問題とも直結していますよね。

**シオリヌ** まだまだ性教育といつてイメージすることの幅がすごく狭いというか、性教育イコール生理の仕組みやセックスのことを教える、みたいな想像をされることがすごくあるんです。もちろんそれも大事な要素だし、妊娠や避妊のことを伝えることも必要なんですけど、やっぱり一番大切なのは、あなたの体はあなたのもの、あなたの体のこともあなたに決める権利があるという、それが根本だと思うんですね。同じように、他者と関わる時には明確なコミュニケーションを心がける必要がある、そういうことが土台だとすごく思います。

**香野** 確かに、根本にはコミュニケーションシオンや人権のことがありますよね。再確認できたと思います。最後に、本誌の読者にメッセージがあればお願いします。

**シオリヌ** 子どもたちの人生や子どもたちの体は、その人自身のものであるという姿勢を大事にしながら、子どもたちを支えられる大人が社会の中で増えてほしいなと思います。

**香野** それは私たちの仕事の目指すところと同じですよ。今日はありがとうございました。

シオリヌ（大貫詩織）

助産師／性教育 YouTuber／NPOコハダ代表理事。総合病院産婦人科で助産師としての経験を積んだのち、精神科児童思春期病棟で若者の心理的ケアを学ぶ。2017年より性教育に関する発信活動をスタートし、2019年2月より自身のYouTubeチャンネルで動画を投稿。チャンネル登録者数は17.6万人。著書に『CHOICE自分で選ぶための「性」の知識』『産んでくれないで頼んでないし』（イースト・プレス）、『こどもジェンダー』（ワニブックス）、『やらねばならぬとおもいつつ』（超初級）性教育サポートBOOK』『食べるの怖い』（ハガツブックス）ほか。

香野 毅（こうの・たけし）

1970年、佐賀県武雄市生まれ。静岡大学教育学部教授。博士（心理学）。専門は障害児心理学、臨床心理学。九州大学教育学部卒業。同大学院を経て九州大学発達臨床心理センター主任、2000年より静岡大学教育学部講師、同准教授を経て現職。著書に『動作訓練の技術とこころ』（遠見書房）、『KIDSとしての救急箱』『肢体不自由を中心とした障害者臨床・療育におけるアセスメント』（静岡学術出版）、『支援が困難な事例に向き合う発達臨床』（共編著、ミネルヴァ書房）、『基礎から学ぶ動作法』（共著、ナカニシヤ出版）、『インクルーシブ教育時代の教員をめざすための特別支援教育入門』（共著、明文書林）ほか。